

モザイクを頭に被るという大胆な 発想とその理由

“Martin Backe’ Pixelhead”

text: Daisuke Nishimura 西村大助

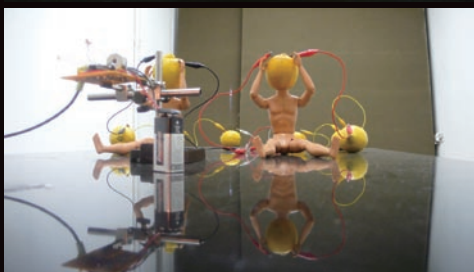
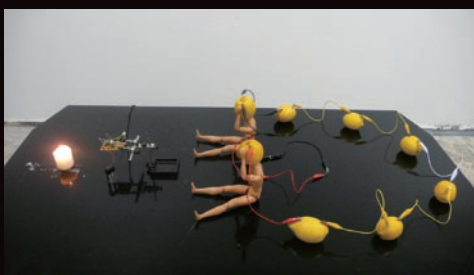
ベルリン応用科学大学のサウンドアート&デザインコースで教鞭をとる傍ら、アートラボ「aconica」では、コマースからアートまで、やりたい放題遊んでいるMartin Backesは、パフォーマー、ハッカー、作曲家、講師、ディレクター、サウンド&メディアアーティストなど、マルチな顔を持つ神懸かりな人物。いままでに、アート、心理学、エレクトロニクス、考古学など、ハチャメチャに勉強したために、頭のなかは混ざりあっちゃってトンデモないことに。もしかしたらそれが原因で、モザイクをかぶろうなんて思ってしまったのでは…。

「これは、メディアから身を守るカモフラージュなんだ。許可がない限り写真を撮られても顔を写すことはできない。単純な布だけの作品なのにインターネットエイジをよく表現していると思う。この下に隠されている顔は、ドイツの政治家Thomas de Maizièreなんだ」。

なるほど…。しかし、思ったよりまともな考え方で安心。それでは、彼のメインテーマであるサウンド・インスタレーションとはどういったものなのだろうか。「90年代にDJをやりながら、この世界に足を踏み入れたんだ。光やスカルプチャーをはじめとした、インタラクティブなものと音楽を使って、知覚を探索しながらシンボリックな表現

で、社会や宗教、政治について感じさせるものが作りたいんだ」という。そんな彼がインスタレーションを受けているのは「世界全部」らしい。まあ、そうだろうな…。70年代後半に、作家のStephen Bakerが指摘していることだけど「創造性というものは、天性の才能だとか夢で与えられるような神秘的なものではなく、誰でも身につけられる技術。心を開いていればアイデアはどこにでもあるんだ。ただ、そういったアイデアを形にするためには集中力が必要なんだよ」と。

現在は『Pixelhead』プロジェクトのほかにも、Reynold Reynoldsの新作『The Lost』のサウンドディレクションや、ネットレーベル『PublicSpaces Lab』とのコンビ作品『Hydrophonic - sub aquatic perspectives』のリリースなど、とにかく大活躍のMartin。詳しくはオフィシャルウェブサイトをチェック。<http://www.martinbackes.com>



<http://www.martinbackes.com>

photo by De:Bug